

埋文にいがた

No. 52

2005. 9. 30

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

今年度発掘調査の紹介

やち 野地遺跡 (胎内市大字八幡字野地285ほか)

野地遺跡は、飯豊山系を水源とする胎内川によって作られた扇状地の端部に立地しています。上流部で伏流水となった胎内川の水は沖積地のあちこちで湧き出し、地元の皆さんには「どっこん水」として親しまれています。

日本海東北自動車道の建設に伴い、5月初旬から発掘調査を行っています。調査範囲が橋脚部分に限られるため、90m²の調査区を5か所にわたって調査しています。現在までに、縄文時代後期後半～晩期前葉（約3,500～3,000年前）におよぶ最大7層の生活跡が確認されています。現在は縄文晩期の地層を調査中で、木の実集中範囲・火を焚いた跡・木柱・足跡列などが見つかっています。特に注目されるの

がクルミ・トチノキ・クリなど堅果類の殻が、種類ごとにまとまり、混じることなく出土したことです。ほとんどが中身を取り出すために打ち割られていることから、実のなる季節やアク抜き処理の違いなどに応じて、ここで木の実の加工や廃棄が行われていたことが分かります。周辺からは足跡列が見つかっており、木の実を捨てに来た人々が残したものと考えています。また、直径55cmを超える一抱えほどの木柱も発見されました。建物の一部と考えられますが、現在調査中です。

大量に出土した遺物には、土器・石器・耳飾・櫛・石剣・焼けた獸骨・炭化した木の実などのほかに、完全な形の弓があります。長さ160cmを測り、一方をするどく尖らせ、もう一方には弦をかけるための弓弾が作り出されています。縄文人骨の研究によれば、当時の男性の身長は150cm前後とされていますから、この弓は身の丈以上の長さになります。実用品であったか否か、検討の余地があるのかも知れません。

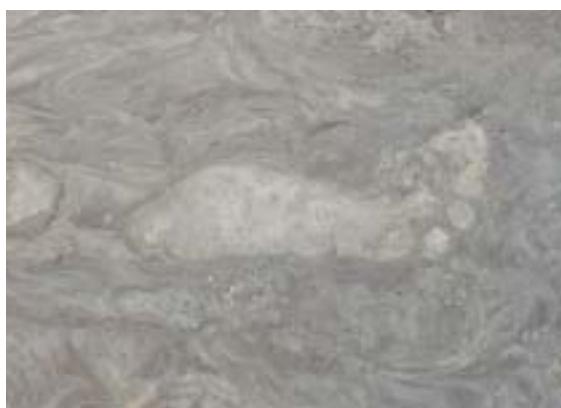
これからは、さらに古い地層の調査を進めるとともに、長期間におよぶ遺跡の変遷について分析を行っていきます。今後の調査成果にご期待下さい。
(渡邊裕之)



クルミの集中範囲



直径55cmもの柱



縄文人の足跡

きつのみや 狐宮遺跡 (上越市門田新田字狐宮ほか)

狐宮遺跡は、高規格道路（上越三和道路）建設に伴い、4月から10月の予定で発掘調査を行なっています。この遺跡は、高田平野を流れる関川、飯田川、櫛池川に囲まれ、関川の約2km東側、標高約8mの微高地に立地しています。旧高田市街の北東に位置し、周囲には水田が広がっています。南西から西にかけては妙高山・火打山・焼山の頸城三山から青田難波山・春日山を含む西頸城丘陵、南から北東にかけては斑尾山・鍋倉山から菱ヶ岳へと連なる関田山地・尾神岳・米山など、上越地方を代表する山並みを遠望することができます。

5月初旬から始まった本格的な発掘調査で、平安時代初頭から中頃（8世紀後半～9世紀）

の遺跡ではないかと考え、調査を進めています。今までに、腰帶石鎧（丸鞆：古代の役人が身に付けた帯の飾り）や数点の墨書き器が出土しました。これらは、この遺跡の性格を考える上で、重要な遺物ではないかと注目しています。

現在、この遺跡では、掘立柱建物・竪穴住居・井戸及び、多数の畝状遺構や用水と思われる幅の広い溝などの遺構が検出されています。掘立柱建物及び竪穴住居と畝状遺構は重なっていることが確認され、遺跡形成の復元に重要な手掛けかりを与えてくれるものと思われます。また、幅の広い溝とその他の遺構との位置関係も、注目すべき点と考えています。さらに、井戸の一つには、しっかりとした側板及び曲物の底板が、井戸側として据えられていました。

高田平野には、この遺跡を始め、三角田遺跡や下割遺跡など同時代の遺跡が数多く存在しています。それらの遺跡との関連を踏まえながら調査を進め、高田平野における平安時代の人々の生活について明らかにできればと考えています。

(桐原雅史)



県道南調査区のピット



掘立柱建物



井戸側出土状況

ひるづか 昼塚遺跡 (胎内市大出字昼塚433-1ほか)

昼塚遺跡は胎内市（旧北蒲原郡中条町）に所在し、胎内川扇状地の扇端部付近に立地する縄文時代晚期の遺跡です。日本海東北自動車道の建設に係り、平成16・17年の2か年で発掘調査を行いました。

昨年度の調査は、交差する県道の北側の2,920m²について行い、掘立柱建物6棟、土坑140基などを検出し、土器（深鉢形・浅鉢形・注口など）や石器（石鏃・石匙・磨製石斧・磨石類など）が出土しました。本年度は、県道部分とその南側の1,530m²を対象に行いました。厚さ30~50cmの耕作土を含む表土層を除去すると炭化物層（遺物包含層）があり、この下面で遺構が検出されました。標高は7m前後です。遺構検出面より下層は青灰色シルトや灰色砂などが厚さ30~40cmほど堆積し、旧河床砂礫層となります。

本年度調査区域のほぼ半分は、近世以降の流路跡により旧河床砂礫層上面まで流失していました。遺跡は流失をまぬがれた県道部分を中心に残存しています。発掘された遺構には、土坑とピットがあります。土坑は102基確認され、断面形が弧状や半円状のものが大半をしめます。そのほかには小型袋状土坑があり、基底面に敷物の可能性のある薄い腐植物層が広がり、その上面からクルミやトチノキが検出されました。ピットは188基確認され、柱根が残存していたものが30基あります。これらは掘立柱建物の柱穴と考えています。現時点での掘立柱建物と認定できたのは3棟で、いずれも亀甲（長六角形）形です。なお、土坑や柱穴は切り合っているものが多く、掘立柱建物の範囲が重なっているものもあります。出土遺物はほとんどが土器（深鉢形・浅鉢形など）で、石器は石鏃1点などわずかです。遺物の多くは土坑覆土中より出土したものです。遺跡は発掘した遺構と出土した土器の特徴及び放射性炭素年代測定により、縄文時代晚期前葉～中葉（今から3,100~3,000年前）にかけて営まれた集落跡であることがわかりました。

今後、2か年の調査結果をもとに昼塚遺跡の性格を明らかにするとともに、胎内川扇状地上に近接し、現在調査中で同じ縄文時代晚期の道下遺跡・野地遺跡との関係を明らかにしていくことも課題となります。

(調査担当者：(株)シン技術コンサル 折井 敦)



県道部分の遺構配置状況



掘立柱建物の柱根検出状況



小型袋状土坑の完掘状況



土坑内土器出土状況

うえのひがし
上野東遺跡
 (東蒲原郡阿賀町大字西字上野)

上野東遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高92~94mを測ります。国道49号揚川改良の建設に伴い、4~6月にかけて発掘調査を行いました。その結果、約5,000年前に堆積した「鹿瀬軽石質砂層（福島県金山町の沼沢火山の火山灰が只見川・阿賀野川によって運ばれ再堆積したもの）」の上下から遺構・遺物が見つかりました。

下層では縄文時代前期後葉（約5,000年前）の堅穴住居1基をはじめ、土坑、集石土坑、焼土遺構などの遺構が見つかっています。堅穴住居は浅い掘込みがあり、壁際から内向きの細い垂木尻の穴が見つかり、テント式の住居であったと考えられます。

上層では、同じ縄文時代でも約5,000年前よりも新しい遺構・遺物のほか、平安時代のカマドを持つ住居も見つかりました。平安時代の住居は東蒲原郡内では初めての例となります。
 (高橋保雄)



遺跡全景



テント式の堅穴住居



カマドを持つ堅穴住居

げんみょうだけ
現明嶽遺跡
 (東蒲原郡阿賀町大字西字現明嶽4,734-8ほか)

現明嶽遺跡は阿賀野川左岸の段丘上に立地し、標高88~91mを測ります。上野東遺跡とは沢を挟んで約500m離れています。国道49号揚川改良の建設に伴い、6~8月にかけて発掘調査を行いました。その結果、約5,000年前に堆積した「鹿瀬軽石質砂層」の上下から遺構・遺物が見つかりました。

下層では縄文時代前期末葉（約5,000年前）の焼土遺構、土器集中などの遺構が見つかっています。上層では縄文時代後期中葉（約3,500年前）の集落跡が見つかりました。集落跡は堅穴住居3基をはじめ、土坑、集石土坑などから構成され、幅の狭い段丘上で広場を確保するため、住居を広場の周縁に配置するなどの工夫が見られました。また、土器・石器などの遺物とともに、同一個体の土偶やスタンプ形土製品の出土など注目される土製品も見つかっています。
 (高橋保雄)



遺跡全景



堅穴住居（縄文時代後期中葉）



土偶・スタンプ形土製品

きたおきひがし
北沖東遺跡
 (南魚沼市小栗山字北沖19-3ほか)

北沖東遺跡は魚野川の左岸に位置し、魚沼丘陵から流れる庄之又川が形成した扇状地と鎌倉沢川が形成した扇状地に挟まれた低地部に位置しています。北沖東遺跡の調査は国道17号六日町バイパス建設に伴い、平成16年度から行っています。平成16年度の調査では溝や杭列、人や動物の足跡など、水田に関連する可能性のある遺構が検出されました。

今年度の調査では、古墳時代の自然流路や杭列などが確認されました。自然流路には、木を何本かまとめて渡してあるか所があり、人が流路を渡るための木道(橋)と考えられます(写真)。遺物では古墳時代の土師器や木製農具(鋤)などが出土しており、検出された遺構や出土遺物から、北沖東遺跡は水田に関連する遺跡であることがわかります。また本遺跡の位置する扇状地端の低地部には水田などが存在し、丘陵末端などの比較的標高の高い場所には金屋遺跡(16・17年度調査、本紙No.48・51で紹介)のような集落が存在することがうかがえます。

(山崎忠良)



木道(橋)の検出状況

さわだ
沢田遺跡
 (胎内市大字赤川字沢田)

沢田遺跡は胎内川扇状地の扇端部にあり、現在の標高は9.5～10mです。本遺跡は平成16年度から2か年にわたり、発掘調査を行いました。遺物包含層は上層と下層に分けられ、これらの地層の中には遺物のほかに炭化物の小さな粒が入っていました。今年度は昨年度調査区の南側を調査しました。

遺構は溝4条、土坑5基、ピット5基、炉跡1基、集石4か所、炭集中5か所、性格不明遺構10か所が見つかり、また調査区の東側半分は川跡でした。炉跡(SR1153)は底面が焼けて赤みを帯び、その北側に隣接して見つかった集石(SS1151)は、すべての石が焼けてその大部分がその場で割れています。それに対して、ほかの3か所の集石(SS1135、1136、1141)は石が焼けて割れているのですが、割れた破片がばらばらに散っており、地面が焼けた跡も見つかなかったことから、ほかで焼けた石がここに捨てられたものと考えられます。炉跡や焼け石がどのように使用されたものかは今のところわかりませんが、昨年度の成果とも考え合わせると、せいえん製塩(塩つくり)に関わる可能性も考えられます。

遺物は土師器碗、黒色土器碗、製塩土器、須恵器甕・瓶、さらには焼けた石が出土しました。本遺跡の営まれた時期は、出土遺物から上下層とも10世紀代と考えられます。

(株)野上建設興業 小村正之)



集石(SS1151 手前)、炉(SR1153 奥)
遺物出土状況



性格不明遺構(SX1140 白線内)、
集石(SS1141 奥) 遺物出土状況

報告書作成中の遺跡

住吉遺跡

(新発田市中島字住吉)

住吉遺跡は、新発田市（旧紫雲寺町）に所在します。日本海東北自動車道建設に伴い、平成10・11年度の2か年にわたって発掘調査しました。遺跡は旧紫雲寺潟（塩津潟）の南潟端低湿地にありました。調査の結果、12世紀終わりから14世紀前半にかけての鎌倉時代の集落であることが分りました。

掘立柱建物は20棟以上確認され、中には100m²以上の面積を持つ建物もあります。低湿地であったことから、柱の根元部分（柱根）や柱が沈み込まないように柱の下に敷いた板（礎板）が多く残っていました。材はクリの木が多いようです。また、井戸も多数見つかりました。方形の木枠を持ち、中に大きな曲物を据えた井戸がいくつか見られます。ほかに、東西南北に走る溝も多数あります。南北に走る溝は紫雲寺潟に注いだと思われます。

遺物では、輸入陶磁器の青磁・白磁の碗・皿類が多く出土しています。青磁の高級碗や盤、青白磁の梅瓶、白磁の水注・小壺・合子等は、かなりの身分の人の存在を表わしています。ほかに、珠洲焼、東海地方の常滑窯、吉瀬戸山茶碗・鉢皿、在地の笛神丘陵で焼かれた陶器、土師質土器皿等があります。土器以外では、田ならしにつかう木製の朳・鎌・鉄斧と言った農工具、遠く九州から運ばれたと考えられる石鍋や砥石もあります。

(高橋 保)



調査区全景(平成11年度)

正尺C遺跡

(新潟市葛塚字正尺)

正尺C遺跡は阿賀野川の右岸に位置し、海岸からの距離は約5kmを測ります。周辺の地形は海岸沿いに発達した砂丘列と、砂丘間の低湿地および福島潟などの潟湖からなり、遺跡は旧河道沿いに形成された自然堤防上の微高地に立地します。日本海東北自動車道の建設に伴い、平成11・12年度に発掘調査を行ないました。

調査の結果、古墳時代前期の集落であることがわかりました。遺構には竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・土坑・溝等があります。周溝状遺構のうち中央で掘立柱建物が検出されているものは、周溝をもつ住居の可能性が高いと考えられます。周溝からは器台・高杯・壺・甕・縄文施文の甕など多数の土器や管玉が出ました。中でも目を引くのが多様な形態の器台・鍔付き結合器台です。鍔付き結合器台は北陸系の土器と考えられてきましたが、系譜については未だ不明な点が多く、今回まとまった資料が得られたことで検討の手掛かりが得られるかもしれません。また、縄文施文の甕は東北地方に由来するものとして、遺跡の性格を考える上で重要です。

(土橋由理子)



遺跡全景



出土土器
(前列:器台、中列:鍔付結合器台、後列:壺・甕)

埋文コラム「発掘から見えてきた縄文時代の縄」

「縄文」の名称の由来

縄目の文様が施された土器は「縄文土器」と呼ばれ、この土器が主に使用された時代を一般的に「縄文時代」と呼称しています。この「縄文」という名称は、1877(明治10)年から行われた日本最初の学術的発掘調査とされる大森貝塚(東京都)の報告で、E・S・モースが縄目の文様を持つ土器を「cord marked pottery」とし、それが「縄紋土器」と訳されたことに由来します。今回は縄文時代の「縄」に注目してみたいと思います。

遺跡から出土した「縄」

遺跡から縄そのものが見つかることは稀で、新潟県では新発田市の青田遺跡(約2,500年前)から出土しています(図1)。縄文時代の「縄」(撫紐)にどのような種類の撫り方があったのかは、土器に残された縄目の文様から知ることができます。

縄文時代の縄目文様

土器に施された縄目の文様がどのようなものなのか、見たことがあるでしょうか。出土した土器に施されている縄目文様から縄文原体(縄目の文様をつけるもとの縄そのもの)を復元してみます。縄文時代の縄は、草木の茎や纖維等を①~③のように撫ったと考えられています。

- ① 纖維の束を撫り合わせて縄を作ります。
- ② 2本の縄を撫り合わせ(1本の縄を半分にし、撫り合わせてもよい)。土器の器面に回転させると線状の圧痕が斜めに走ります(条)。
- ③ ②をさらに撫り合わせ、回転させると米粒状の圧痕(節)が斜めに連続する文様ができます(図2)。



1 青田遺跡出土の縄

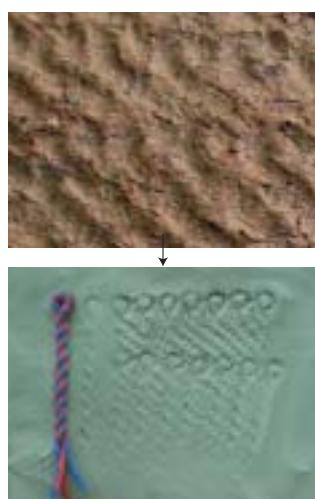
以上の縄を基本とし、縄文時代に使用された縄文原体をほんの一部ですが復元してみました。(図2~4)また、土器の表面に縦、横、斜め方向に回転や押圧することで、また違った文様効果を生み出します。

縄文土器というと、どんなものをイメージするでしょうか。新潟県を代表する火焰型土器のような沈線や隆帶文様で描く装飾性の豊かなものが注目されますが、縄文土器の縄文にも注目してみてください。きっと縄文人の器用さやこだわりを感じることができます。

(齊藤 準)



2 単節縄文



3 環付き縄文



4 結束縄文

<参考文献>

1979 山内清男『日本先史土器の縄文』先史考古学会／2005 可見通宏『縄文土器の技法』同成社
※今回は、どのように撫っているのかわかりやすくするために色違いの紙テープを使用した。

県内の遺跡・遺物50

いいづなやま
飯綱山古墳群（昭和47年 県指定）
 遺跡所在地：南魚沼市大字余川字飯綱山

飯綱山古墳群は魚野川左岸の魚沼丘陵の緩斜面上に位置します。標高は約230mで、平野部との比高が約70mあります。丘陵上からは三国川扇状地や魚野川沖積地などの平野部、さらに国指定（昭和54年）史跡「坂戸城跡」のある坂戸山を眺めることができます。また北約1kmには蟻子山古墳群があります。

東西約250m、南北約300mの緩斜面上には、昭和初期の調査で大小100余基の古墳が存在していましたといいます。しかし、その後の開墾や土地造成のため、現在は30基ほどに減っています。

古墳の形態は円墳で、直径10m前後、高さ1～2mの低い墳丘をもつものが多く、周溝を有するものも多数ありました。これらの古墳群の造営時期は古墳時代中期から後期で、5世紀後半から6世紀前半に比定されます。同時期の群集墳（初期群集墳）には高田平野西南部の天神堂、觀音平古墳群があり、少数のやや大形の円墳と多数の小形の円墳から構成される点で類似しています。

飯綱山古墳群最大の古墳は墳丘径36mを測る10号墳（大塚古墳）と27号墳（男塚古墳）で、古津八幡山古墳（新潟市）に次ぎ県内第2位の規模です。副葬品としては、短甲・鉄鋒・直刀・鉄鏃・馬具などのほか、勾玉・管玉・臼玉・鏡、土師器・古式須恵器などが出土しています。

近年この丘陵裾周辺で、余川中道・金屋・北沖東遺跡といった古墳時代中期～後期にかけての集落の発掘調査が相次ぎ、飯綱山古墳群や蟻子山古墳群を造営した集団の集落ではないかと推定されています。

（写真・資料提供 南魚沼市教育委員会）



遺跡遠景（東から）



10号墳（大塚古墳）



短甲（保存処理したもの）

埋文にいがたNo.52

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟市金津93番地1
 TEL (0250) 25-3981
 FAX (0250) 25-3986
 e-mail : niigata@maibun.net
 U R L : <http://www.maibun.net>
 印刷 阿部印刷株式会社